
翠の風に浮かぶ花

雪村マイカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翠の風に浮かぶ花

【Nコード】

N1929S

【作者名】

雪村マイカ

【あらすじ】

イケメン御曹司兼学園のアイドル・王子谷聖哉は、昔から数多の女子に追いかけられ続け精神的にも肉体的にも追い詰められていた。そんなある日怪我をして保健室に行くと、保健委員の女子生徒が一人で留守番を…。

ロミジュリ番外編です。

王子谷君と姫ちゃんの出会いを書きます。

こちらは全て王子谷君視点で進みますので
ご了承下さい。

これが運命の出会いだとしたら

俺は俺だ。

一人の人間、一人の男なんだ。

イケメン御曹司や王子様なんていう名前のブランド品じゃない。
なのに、どうしてみんな分かってくれないんだろう。

そう思っていた時、俺は君を見つけた。

「王子谷くーん！」

「キヤーツ！こっち見た！」

「かつこいいーっ！」

もうやめてくれと言いたくても、言えない。

学園のアイドルという一見華やかで高価な仮面は、いつだって俺を苦しめる。

幸運なのか不運なのかは分からないが、俺は金銭的にかなり余裕のある家庭に生まれ育った。

周りに言わせれば俺は容姿と才能にも恵まれているらしいが、才能に関しては俺自身が自分の力で勝ち取ってきただけの話。

俺の両親や祖父母だって、血の滲むような努力をしてそれぞれの会

社を守っているんだ。

だから何事も努力するのは当たり前だと教えられてきたし、俺もそれが正しいと思う。

ただほんの少し環境が良かっただけで、後は何ら他の人と変わらな
い。

でも俺に寄ってくる人間（9割は女の子だけど）は、そういう俺の
思想を何一つ分かってくれなかった。

俺の周りには常に女の子がいて、アイドルを見るような目で追いか
けて来るような子、恋愛感情を持ってぶつかって来る子と色々な子
がいたけど、結局どの子も「イケメン御曹司を追いかける私」もし
くは「イケメン御曹司の彼女」というポジションが欲しいだけで。

そのせいであまり人を信じられなくなった俺は、同性の友達を作る
のにも苦労した。

今でこそつるんでくれる友達は出来たけど、心の底までは見せてい
ない。

そんな俺も高校生になり、中学からやっているという理由でテニス
部へと入部した。

俺の通う「ユリ高」こと百合ノ花高校は全国大会常連校とまで言わ
れる強豪だから、切磋琢磨するには申し分ない環境だと思う。

しかし強豪校の宿命というのか。

追いかけて来る女の子は前よりも増えたように感じる。

先輩方はもう慣れているのか特に何も言わない。

精神的にも肉体的にも追い詰められ練習に集中出来なくなった俺は、
ついに怪我をしてしまった。

保健室に行くと先生はおらず、保健委員とおぼしき女の子が1人で椅子に座って雑誌を読んでいる。

意志の強さを感じさせる凛とした大きな目に、長い睫毛、つやめいた唇、茶色がかったセミロングの髪の毛は思わず見とれてしまう程に美しかった。

彼女はそんな俺の視線に気付いたのか、少しけだるそうな表情で俺に話しかけてきた。

「先生なら今居ないよ。急いでるなら私がやるけど。」

これが、俺と彼女の出会い。

俺の心を救ってくれた、出会いだった。

これが運命の出会いだとしたら（後書き）

勢いでやってしまったww

ロミジュリ本編に書いても良かったんですが、あれは全部姫ちゃん視点で行きたかったので分けて書く事にしました。

俺は君と愛の神様に

「…じゃあ、お願いしようかな。ただの擦り傷だし。」

「分かった。じゃここ座って、これに名前書いて。」

彼女は俺に記録用の紙を渡すと、手当ての準備を始めた。

上履きとリボンの色から、俺と同じ１年生だという事が分かる。

それにしてもこの手際の良さ、是非ともテニス部のマネージャーに欲しい。

「ねえ、テニスってそんなに生傷絶えない訳？野球部やラグビー部でも、こんな怪我してる人いないんだけど。」

「え？何で俺がテニス部だって…。」

「ユニフォームに書いてあるだろ。」

確かに俺の練習量は先輩よりも多いと思う。

自主練は必ず出ているし、自由参加である朝練も時間ギリギリまでやっている。

どうやら前に付いたまま消えていない傷跡を見られたみたいだな。

「ま、それだけ頑張ってるって事なんだろうけど、あんまり無茶すんなよな。じゃないといつかミイラ男になるぞ。」

…初めての事だった。

その綺麗な肌に傷が付くのだ、王子様に生傷は似合わないだの言う

子はいくらでもいたけど、こんな風に俺の努力を認める言葉をくれた子は今までにいなかったから。

口元がニやつくのを抑えながら俺は彼女の手当てを受ける。消毒液を使ってる筈なのに、痛みがほとんどない。

「すごいな、先生にやって貰うより痛くないよ。」

「妹と弟がまだ小さくてしょっちょう怪我してるからね。その手当てしてるから慣れてるんだよ。」

なるほど。

痛がる子供の為に開発した消毒液の加減が、ここで活かされてるって訳か。

この手際と見た目の良さ、そして俺に対するごく普通の態度。

名前もクラスも知らない彼女に、俺の好奇心は大いにかきたてられた。

「はい、出来上がり。」

「ありがとう。」

「ごめんねー姫野さん！留守番ありがとう！もう帰って良いよ！」

「はい。じゃね、先生と見知らぬテニス部員。」

「気をつけてね！」

手当てを終えた瞬間、先生が帰って来た。

聞きたい事が何も聞けなかったのは残念だったけど、彼女は今週いっぱい当番みたいだからまた保健室に行ってみよう。

きつとこの時に、俺は彼女を好きになったのかも知れない。

大いなる賞賛と

彼女との出会いから3日。

「姫野」という苗字は辛うじて分かったが、それ以外は謎のまま。保健室に行きたいと思う時に限って、怪我もしないし具合も悪くならない。

それなら仮病を使って行けばいいだけの話だが、大好きな部活が出来なくなりそうなのでそれはやめておこう。

どうやって彼女と接触しようか悶々としていた休み時間、同じクラス同じ部活の友達・岩城昌之いわしろまさゆきが突如体調不良を訴える。

保健室行く？というクラスの女子の声が聞こえたので、すぐさま俺が、と名乗り出た。

そつ、万が一の可能性に賭けてみたかったのだ。

友達の体よりも自分の願いを優先させてしまい悪いなと思いつつ、俺は昌之を保健室まで連れて行った。

保健室に行くと、先生と姫野さんが椅子に座って雑談をしている。

俺の狙いは見事に当たった。

先生は昌之をベッドに寝かせると、担任に話して来ると言って保健室を出て行った。

「あんた、もう良いよ。後は先生と私がやるから。」

「あ、うん。でももう少しここに居ても良いかな？」

「心配なの？」

「それもあるけど。少々君に興味があつてね。」

そう言うとな彼女は不思議そうな表情を見せる。

その顔すら可愛いと思うなんて、俺はおかしいのだろうか。

「私に？何で？」

「うーん…俺の好奇心が擽られたから、かな。」

「はあ？」

「3日前、怪我の手当てをしてくれた時にね。」

好奇心、いやそれとも少し違う気がするが、一番はそうだ。

ただごく普通に接してくれた事で、どんなに心が癒されたか分からない。

「あの時は保健委員としての仕事をしたただけだ。特別な事は何もしてない。」

「それが嬉しかったんだよ。ありがとう。」

「？よく分かんないけど…どういたしまして。」

言葉遣いはあまり良くないが、心根はとても暖かくて優しい子なのが態度で分かる。

近付いてくる女の子がこんな子ばかりなら良いんだけどな。

初めて、女の子との会話を楽しいと思えた。

「岩城君、お母さんが来てくれたみたいだから、今日は帰って家で休みなさい。」

「はい、すみません…。」

顔面蒼白の昌之にお大事になと言えば、ありがとうと力なく返してくれた。

そうこうしているうちに、時刻はチャイムが鳴る1分前。先生に早く教室に戻れと促される。

「ヤバッ！教室一番端っこだからもう行かなくちゃ！」

ああ、またしても逃げられたか。

追いかけても追いかけても捕まらない感じが、堪らなく新鮮だ。

俺はくつくつと喉を鳴らして笑いながら、教室目掛けて走ってゆく彼女の姿を目で追いかけた。

心からの感謝を

今日の練習は1、2年生対3年生の試合。

この時は応援ギャラリーの数がいつもの倍になる。

声援は力になるって言うけど、俺の場合はその逆で。

集中出来ないから本当はやめて欲しいんだけど、言える筈もなく今日も黄色い声を背に練習に励む事になるのだった。

「王子谷、あんまり周りは気にするな。目の前のボールだけを見てれば良いんだ。」

「はい。」

2年生の先輩が優しくアドバイスをくれるけど、俺の頭には半分も届いていない。

俺はダブルス1で同じ1年生の真木^{まき}とペアを組んだ。

彼は中学でダブルス専門だったみたいで、とってもやりやすい。

良い感じで先輩ペアを追い詰めた所で、さあこれからだと言い合っていたら一際大きな声援が聞こえてきた。

「王子谷くーん！愛してるー！」

…何なんだよ、愛してるって。

俺はお前の彼氏じゃないし、むしろ存在すら知らないんだよ。

今まで張り詰めてた集中力の糸がプチンと切れた音が聞こえた。

「王子谷、^{なかお}中尾と代わるか？」

「大丈夫。やれるよ。」

強がってそう言ったけど、正直いつガタガタになってもおかしくない。

メンタルの弱さは昔から変わらないな。

「王子谷ーっ！行ったぞ！」

真木の声が聞こえた時には、既にボールは俺の横を掠めていった。だが走れば間に合うかも知れない。

限界ギリギリの集中力の中で俺は全力で走ってボールを追いかけたが、もうすぐで届くという所で大きく転んでしまった。

そこから先の記憶はほとんどない。

気が付いたら保健室のベッドに寝ていた。

「目、覚めた？」

最近見知ったあの顔だ。

呆れ果てたような表情で俺を見つめてる。

「ストレスと疲労で、気を失ったんだって。だから無理すんなって言ったのに。」

「そっか。」

「ま、でもテニス部は大変だよね。練習はきついし、馬鹿な女子には追いかけられるし。」

「うん。」

この流れで俺は、ずっと抱えていた悩みを打ち明けるべく口を開いた。

何故かは知らないけど、彼女には全て話せそうだって思ったから。

ずっと歌い続けよう

「いつもイメージばかり勝手に作られてしまう。それが辛いんだ。」

俺がそう言つと、姫野さんは包帯を準備していた手を止めてこちらを見た。

しかしその視線は、すぐに棚に向けられてしまう。

「勉強、部活…何だつてそう。俺が必死になれば泥臭いのは似合わないつて言われ、何もしてないと言えばスカした奴だつて冷たくされる。それに、楽しくて笑つた時も悲しくて泣いた時も、果てはただ歩いてるだけで騒がれたりするし…。確かにお金に恵まれた環境で育つた事は事実だ。でも俺は自分を商品にしてお金を貰つてるアイドルじゃない。普通の男なんだよ。どうしてみんなそれが分からないんだろう。もう学校なんて来たくないし、報われない努力もしたくないよ…！」

「…。」

コットンと包帯、そしてあの時と同じ消毒液。

彼女は何も言わずにただ黙々と手当てをし、包帯を巻き終わった所でようやく口を開いた。

「…十分じゃないの？」

「え…。」

「だつてそうでしょ？ 努力の跡も見せないで、世間が勝手に作つたイメージと必死に戦っている。十分頑張つたんじゃないの？」

「…。」

心の内を全て話せたからか、さつきまで震えていた体が少し治まった。

涙が出そうになるのを堪えながら、なおも続く言葉に耳を傾ける。

「あんたは色々我慢し過ぎなんだよ。嫌な事ははっきり言う。それも優しさのうちだろ。今まで我慢した分、もっと自分にも周りにも正直で居れば良いじゃん。周りにはあんたがそうなってくれる事を望んでる筈。仮に望まれてなくて周りから人が居なくなっただとしても、あんたの姿、内面をちゃんと見てくれる人は必ず現れるよ。無駄な努力なんてこの世にはない。ウチの大オジイがそう言ってたもん。」

そう言われた途端、心の中で固まったまま動かなかった何かが全て開放された気がした。

それと同時に俺の両目から出てくる、今までの悩みや苦しみ。

女の子の前で泣くなんてみっともないと思っていたけど、何故か彼女の前ではその先入観が通じない。

「いちいち泣くなよな。私が悪い事言っただけじゃない。」

「ごめん、嬉しくて。」

「私はただ意見を言っただけだ。」

「俺にとっては洗礼のようなものだったよ。ありがとう。感謝するよ。」

「はいはい、どういたしまして。」

「もっと自分に正直に生きる。」

大人でさえ分からなかったそれを教えてくれたのは、自分と同じ歳のちよつと気が強い女の子だった。

「ねえ、また話せないかな？」

「どっかで偶然会えたらね。」

「…それでも良いよ。俺はその偶然をずっと待ってる。」

「あ、そう。」

生徒数の多いユリ高で、そんな偶然が起こり得る事は宝くじが当たるのと同じくらいの確率だろう。

でも、そう言われてしまったのだから仕方がない。

限りなく小さなそのチャンスを待ってみようと、心に決めたのだった。

あれから1年近くが経ち、俺は2年生になった。

結局姫野さんにはあれ以来会えないままで。

ずっとずっと探していたけど、見つからなかったのだ。

会えない日々とは裏腹に、彼女への想いだけが募ってゆく。

自分を救ってくれた彼女に、いつしか恋と呼ばれる感情を抱いていたいみたいだ。

始業式の日、新しいクラスを確かめるとE組の所に俺の名前が書かれているのを確認した。

そして同じE組の中に、姫野さんの名前もある。

真梨亜なんて、少女漫画のヒロインみたいな可愛い名前だな。

だけど顔を見るまでは安心出来ないの、俺はすぐさま教室に向かった。

教室に入っすぐ、窓際でお喋りをしていた女の子の集団に視線が行く。

じっとその中を見てみると、あの日からずっと探していた女の子が居た。

大きな目や綺麗な唇は、変わっていない。

髪は色こそそのままでしたが、セミロングだった長さが胸元まで伸びてより一層女らしくなっていた。

神様がくれたこのチャンスが無駄にする理由はないけど、ほんの少し不安もある。

フラれるかも知れないし、それ以前に俺を覚えてないかも知れない。でもそれを恐れたままでは、いつまでも気持ちちは伝わらない。

大きく深呼吸をして、俺は彼女の元へと向かった。

「ちょっと良いかな？」

ずっと歌い続けよう（後書き）

この話はこれで終わりです。

王子君は自分に対して

普通に接してくれた姫ちゃんが

忘れられなかったんですね。

だから姫ちゃんに対しても

まっすぐ正直に

ぶつかっていったんです、きっと。

最後まで読んで頂き

ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1929s/>

翠の風に浮かぶ花

2011年4月10日23時02分発行